

中学校への接続を意識した小学校体育科における授業プログラムの開発

－ボール運動「ネット型」の「ソフトバレーボール」に視点を当てて－

市川 幸子 (群馬大学教職大学院・授業実践開発コース)

1. 目的

本研究では、ボール運動「ネット型」の「ソフトバレーボール」に視点を当て、中学校への接続を意識し、学習成果を高める小学校高学年の体育授業プログラムを開発することを目的とした。

2. 研究方法

1) 授業プログラムの作成手順と検証方法

①授業プログラムの作成：平成24年度に群馬大学、群馬県教育委員会と群馬県小学校体育研究会が連携して作成された「ネット型」の「小学校体育授業プログラム」を参考に全8時間のソフトバレーボールの「授業プログラム」を開発した。

②「授業プログラム」の検証：2021年5月～7月にT小学校6年生3クラスを対象に行った(実践1)。

③「修正版授業プログラム」の作成：実践1での成果と課題を検討し、課題については修正を加えた。

④「修正版授業プログラム」の検証：2021年10月にN小学校6年生1クラスを対象に行った(実践2)。

2) 調査方法

その時間の学習成果をみるために、形成的授業評価(高橋ら, 2003)を毎授業後に実施した。また、体育授業の積み重ねによる成果をみるため、診断的・総括的授業評価(高田ら, 2003)を実施した。

3. 結果と考察

1) 「授業プログラム」の概要

誰もがアクセスしやすく、かつ活用しやすい授業プログラムとなるように、QRコードを採用した。また、ゲームの行い方やローテーションなどについては文字での説明や図、写真に加えて映像を用いた。このことにより、保健体育科免許の保有に関わらず、教師が授業をイメージしやすくなる考えた。なお、映像は、授業者のみならず学習者である児童も活用することを想定して作成した。

2) 「授業プログラム」の検証(実践1の成果と課題)

①形成的授業評価：単元2と8時間目の総合評価(5

段階評価)をみると、3クラスとも1つずつ向上した。

②診断的・総括的授業評価：総合評価(5段階評価)をみると、3クラスとも単元後に「5」に向上した。項目ごとにみると、うち1クラスの「できる」次元の「できる自信」が単元後に低下した。ここでは、技能の習得やルールに課題が残った。

3) 「授業プログラム」の主な改善点

①「技能のポイント」をより分かりやすく記載した。

②授業者が児童の実態に応じてルールを柔軟に変更しやすいように「ルールを例示」した。③1単位時間の配分にゆとりを持たせるために、試合時間を変更した。④単元全体を見通せるように、この時間で何を学び、どのような姿を目指すのかを明確にした。

4) 「修正版授業プログラム」の検証(実践2)

①形成的授業評価：総合評価は「4」から「5」に向上し、「成果」次元は「3」から「5」に向上した。

②診断的・総括的授業評価：総合評価は単元前後ともに「5」であり、「できる」次元は「3」から「4」に向上した。授業の様子をみると、チームの仲間のプレイに賞賛の声を掛けたり、ガッツポーズや拍手をして喜びを表現している児童が多く見受けられた。

4. 結論

文部科学省(2002)は小学校体育における課題として、①専任の体育教員が非常に少ないこと、②児童に体を動かす楽しさを感じさせることができる指導が必ずしも得意でない教員が存在すること(文部科学省, 2002)などを挙げている。この現状に対して、保健体育科免許の保有に関わらず活用することができ、かつ学習成果を高めることができる点において、本研究で作成した「修正版授業プログラム」は大いに貢献できるといえる。

<主な参考文献>

高橋健夫ら(2003)「体育授業を形成的に評価する」、高橋健夫ら編著『体育授業を観察評価する』, 明和出版. pp. 12-15.